

## パラウク・ワ語記述文法

### 学位論文内容の要旨

#### 1) 本論文の観点と方法

本論文は、中国雲南省滄源ワ族自治州東部から耿馬ダイ族ワ族自治州南部に居住する、自称パラウクという民族集団によって話される言語「パラウク・ワ語」を対象とした記述文法である。

パラウク・ワ語は、言語系統的にモン・クメール語族のうちパラウン語派に属するとされる。このパラウン語派内部について、現地調査が困難なことによる資料的制約の問題があり、長らく実態の不明な状況におかれていた。中国では国内に分布するモン・クメール系の人々に対し、「佤(ワ)」「布朗(プラン)」「德昂(ドゥアン)」という3つの民族的枠組みを与えている。しかし近年の著者自身の調査研究などによって、これら3つの民族的枠組みが必ずしも言語学的事実を反映したものとなっていないこと、とりわけ「ワ族」という枠組みにかなりの言語的変異が含まれることなどが明らかになりつつある。この言語変異の背景にはタイ系民族との接触の歴史が推定されるために、言語接触をはじめとする文化動態の研究にとって興味深い対象となっている。とりわけ自称パラウクの集団は、ワ族の中でも人口規模が比較的大きく、分布域が広いという観点からも非常に重要な存在である。

こうした観点から著者は修士課程以来、この地でのフィールドワークを継続してきた。本論文は、先行記述の少ないパラウク・ワ語について、自身の調査資料に基づき、オーソドックスな記述言語学の分析手法によって、その文法の全体像を記述しようとするものである。その際、著者が重視したのは、次の3つの方針である：

- ① 機能的な語の記述を重視する。パラウク・ワ語は、形態類型論的観点から、いわゆる孤立語的な言語、すなわち、語内部に標識をもたず、主に語順によって文法関係が決定されるという特徴を示す言語とされる。しかしながら、特に句以上の言語単位において、文法関係を示す標識が介在する場面も少なくない。8つに下位分類される助詞、これに副詞の一部を加えたものが、機能的な意味をもつ語として重要である。これら機能語の働きを体系的に示すことで、文法全体の見通しをよくすることができる。
- ② 具体的な例文を多く提示する。本論文で用いる例文はすべて自身の調査資料(テキストや会話など)あるいは先行研究に掲載された例文(改めて話者に確認済み)である。各語の意味・機能的な特徴を示すことで、記述の精度を高めることができる。
- ③ 論文全体を通して、相互参照的な体裁をとる。これは記述の一貫性ということ以外に、多義形式に対する記述の試みの意味もある。パラウク・ワ語においては、内容語から機能語へという文法化の流れが至るところで起こっており、両者の派生関係を示すうえでも、このような措置が有効であると考えられる。

## 2) 本論文の内容

本論文は A4 判約 300 ページ (400 字詰め原稿用紙換算約 1000 枚) からなり、「序論」に続く 12 の章から構成されている。

序論では、パラウク・ワ語に関する研究史、社会言語学的状況 (言語認定や方言区分の問題、表記法の問題) などの研究背景について述べ、また以下の議論で必要となる表記規則等について説明している。

第 1 章「音論」では、音韻論を中心とする音的側面の記述を行う。具体的には、音素体系の提示及び各音素に対する音声学的特徴の解説を行い、その上で語形成論に有効な 2 種類の音節タイプ、声母、韻母などの音的単位の設定、また音節の弱化やアクセント、連声などの形態音韻論的現象について述べている。

第 2 章「語論」は、語について取り上げた章であり、語形成における通時的・共時的問題の分析と記述を行っている。また実質的意味をもたない語 (随伴語) の問題、借用語の状況についても扱っている。

第 3 章「品詞論」では、品詞分類に関わる問題を取り上げる。先行研究の品詞分類を批判的に検証し、問題点を明確にした上で、本論文で用いる新しい品詞分類を提示している。

第 4 章「統語論」では、語順、文成分といった統語的な基本概念について、規定している。

第 5 章「名詞に関する諸問題」では、名詞句の構造、名詞の下位分類について分析する。また、名詞に直接かかわる助詞である前置助詞、類別助詞、名詞助詞についてもここで扱っている。そのほか、名詞の意味に深く関与する文法的現象である関係節、コピュラ文、所有・存在文についても取り上げている。

第 6 章「動詞に関する諸問題」では、動詞の下位分類、述部の構造、動詞連続について分析している。動詞連続の記述においては、これを契機にして起こる文法化の問題も取り上げる。また、述部構造の中で重要な役割をもつ動詞助詞についても本章で記述している。

第 7 章「副詞」では、副詞の 3 つの下位類 (後置副詞、接続副詞、感嘆副詞) それぞれの用法を記述している。

第 8 章「その他の助詞」では、5 章から 7 章までで扱わなかった助詞 (副助詞、従属助詞、一般助詞、文助詞) について考察する。

第 9 章「複文に関する諸問題」では、従属節、副詞節、補節、等位節という 4 つの従属節について記述を行い、また副詞節から接続副詞への文法化の問題についても分析を加えている。

第 10 章「その他の重要な文法現象」では、類型論的観点から特徴的であると思われる文法現象について記述・分析を行っている。具体的には、疑問、否定、主題化、省略、等位接続、同格的連続、修辭的技法の問題が論じられている。

第 11 章、第 12 章はともに言語資料の提示である。第 11 章は、文法情報付きのテキスト資料 (本論文で用いた資料の一部をサンプルとして提示したもの)、第 12 章は著者の採集した基礎語彙資料である。

# 学位論文審査の要旨

主 査	教 授	津 曲 敏 郎
副 査	准教授	佐々木 亨
副 査	准教授	松 江 崇

学 位 論 文 題 名

## パラウク・ワ語記述文法

### 1) 審査日程

本論文の審査は次のような日程で行われた。

平成 19 年 12 月 14 日	審査委員会発足
平成 19 年 12 月 21 日	第 1 回審査委員会：論文配布、審査日程の調整
平成 20 年 1 月 11 日	第 2 回審査委員会：口述試験実施
平成 20 年 1 月 11 日	第 3 回審査委員会：試問結果の検討、学位授与の判定
平成 20 年 1 月 21 日	第 4 回審査委員会：報告書原案の作成・検討
平成 20 年 1 月 24 日	第 5 回審査委員会：報告書の作成・確認
平成 20 年 1 月 25 日	審査結果報告書の提出
平成 20 年 2 月 1 日	研究科教授会において審査報告
平成 20 年 2 月 14 日	研究科教授会において審査、学位授与承認

### 2) 審査経過概要

第 2 回審査委員会において、論文提出者から論文内容の概要について説明を受けた後、各審査委員から質疑がなされた。これにより、本論文の主張点がいつそう明確になり、全体として構成・内容とも高い水準にあることが確認された。次いで行われた第 3 回委員会において、学位授与可との判定に至った。ただし若干の軽微な不備が指摘されたが、十分に修正が可能な範囲であるとみて、提出者に改善を求めることとした。その結果、第 4 回審査委員会までに本人から修正箇所が提示され、それをもとに主査を中心に審査報告書の原案作成に取りかかった。この原案をもとに、第 5 回委員会において、報告書内容の検討と確認を行った。

### 3) 本論文の研究成果

審査委員の見解を総合すると、本論文の成果および評価できる点は次のようにまとめられる。

- ① モン・クメール系諸語研究において、従来、分析・記述が不十分であったパラウク・ワ語について、自身の調査資料に基づき、その文法の全体像を客観的分析によって体系的に記述した点。

- ② 文法記述にあたって、機能語の統語的ふるまいを重視し、また多くの具体的例文を提示することで、記述の客観性と精度を高めたこと。さらに、これにより言語類型論に寄与しうるデータと分析方法を示した点。
- ③ 他言語の影響による借用や文法変容など、言語変化の動態論的側面にも目を配り、同系ないし隣接諸言語との関係解明に途を開いた点。

#### 4) 学位授与に関する委員会の所見

審査の過程において、データの分析と解釈や文章表現、構成に関していくつかの改善すべき点が見出されるとともに、章によって多少精度にバラツキが見られること（たとえば4品詞分類のうち、副詞の記述が簡略に過ぎる点など）も指摘された。しかし細かな誤りは十分修正可能な範囲であり、後者の問題にしても、未知のフィールドで一から取り組んだことを考慮すると、むしろ今後の研究発展への基礎固めとしてとらえるべき部分であると認識される。全体として本論文は、独自のデータと手堅い分析手法で貫かれており、理論と記述の両面できわめて高い水準にあると判断される。

こうした点で、審査委員会は、本論文が博士（文学）を授与するに十分値する学問的価値を有するものと、全員一致して認めるに至った。